

Bill Gates &  
unicef

特集

「魔法の0へ  
そして  
ビル・ゲイツと  
ユニセフ



左からビル・ゲイツ、ウォーレン・バフェット、メリンダ・ゲイツ

©Gates Notes

言わずと知れた

マイクロソフト創業者のビル・ゲイツさん。

世界中に普及したパーソナルコンピュータの

OS『Windows』によって世界を変えたと言われる彼が、2000年、妻のメリンダさんと

設立した慈善基金団体が

「ビル&メリンダ・ゲイツ財団」です。

2006年には、世界的な投資家

ウォーレン・バフェットさんから300億米ドル

(約3兆3千億円)という巨額の

寄付を受けて国際的な注目を浴びました。

世界最大規模となったゲイツ財団は

「すべての命の価値は等しい」

という信念を掲げ、

革新的な方法を取り入れながら世界の疾患と

貧困に挑戦し続けています。

「誰ひとり取り残すことなく、

子どもたちの命と健康を守る」が

ユニセフの理念。

共通した目的を持つゲイツ財団と

私たちの協力関係も紐解きながら、

両者がこれまでに成し遂げてきた成果と、

未来への展望を見ていきましょう。



## ウォーレンへの書簡

世界中に強いインパクトを与えた寄付から十年。今年、ビルとメリンダは、ウォーレンに宛て長い手紙を綴りました。ゲイツ財団のこれまでの仕事の成果、そして今後の展望を語った公開年次書簡です。その追伸に、こうあります。

「追伸 多くの人から『乳幼児死亡率を低下させるお手伝いをするにはどうすればいいか?』という質問をいつも受けるのですが、私たちは、世界中の家族と子どもの援助に成功している組織であるユニセフに寄付することを胸を張って勧めています。」

## ゲイツ財団とユニセフ

そう、ゲイツ財団とユニセフは、強い協力関係にあるのです。書簡のなかでビルは「乳幼児死亡率に注目し始めたのは二十年以上前のこと」だと言い、次のように語りました。

「メリンダとふたりで野生動物を見るためにアフリカへ行ったとき、現地の貧しさに愕然としたのです。何百万人もの子どもの命が下痢、肺炎、マラリアで亡くなった。先進国で子ども



バングラデシュ国際下痢性疾患病研究センターの研究に協力する家族を訪ねたメリンダ(中央)とユニセフ事務局長アンソニー・レーク(中央右) 2012年1月 ©Prashant Panjari

がそのような疾患で死ぬことはまずないのに、アフリカでは、ただ貧しさゆえに子どもたちが命を落としている。このあまりの不公平に強いショックを受けました。それから私たちは世界の保健状況について学び始め、問題解決の鍵は「乳幼児死亡率」だと気づいたのです。「乳幼児死亡率」が下がれば、母親たちは自分の子どもたちが生き残ると信じられる。出生率は抑えられていき、一人ひとりの子どもの健康や教育

がその命を守ることを自分たちの仕事の中心に据えました。「乳幼児死亡率・死亡数」という指標は、まさにユニセフが最重要視している指標のひとつ。さらにビルは、開発支援の世界に起業家ならではの価値観を持ち込みました。「リソースを正しく賢く使い、最大限の効果を出す」というのが、これが投資家の神様と呼ばれるウォーレン・バフェットの心を捉え、ゲイツ財団は十年前のあの寄付を受けることに

育に時間とお金をかけられるようになる。やがて家族や国は貧困から脱することができるようになる。これはつまり、栄養・教育・避妊手段へのアクセス・男女平等から国の経済に至るまで、あらゆる社会的進歩は「乳幼児死亡率」を下げることで可能になる、ということなのです。

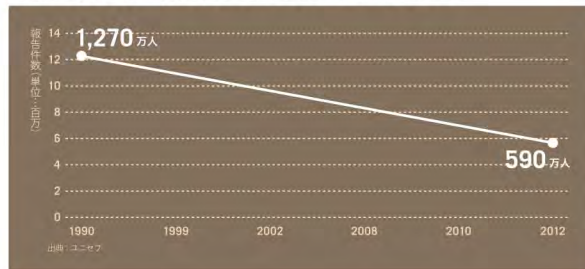
このような考えに至ったふたりは、ゲイツ財団を設立し「子どもの命を守ることを自分たちの仕事の中心に据えました」。

なつたのです。

## Gavi アライアンス

実際、1990年から毎年減り続けてきた乳幼児死亡率は、財団が設立された2000年以降、さらに予想を上回るスピードで減少しました。最大の理由はワクチンだ」とメリンダは言

5歳未満児の死亡数は、1990年と比べ、半減しました



ます。立役者は「Gavi アライアンス(連携)」。この国際金融資金を利用した資金援助プログラムを通じてワクチンの購入資金が用意された結果、それまでは市場として見なされていなかった貧しい子どもたちの需要に製薬会社の目が向いたのです。

こうしてワクチンの開発と生産が進んだことによつて、例えば、一回の注射で5種類の致死性感染症から守ってくれる「5価ワクチン」の購入価格は、従来の半額(1回分約83米セント)になりました。世界にワクチンが行き届くようになり、多くの乳幼児たちの命が感染症から守られています。

ユニセフは各国政府や世界保健機関(WHO)、世界銀行グループ、製薬業界などとともにこの連携に加わり、2000年以来、世界で5億8千万人もの子どもたちの予防接種を支援してきました。

## 世界の子どもたちを支える、ユニセフの物資調達

先日来日したユニセフ物資調達局ラウティオ副局長が、ワクチンを筆頭とするユニセフの支援物資調達について語ってくれました。(2017年3月 ユニセフハウスにて)



ユニセフ物資調達局 副局長 スヴィ・ラウティオ ©日本ユニセフ協会

日本の皆さま、いつもあたたかなご支援をありがとうございます。ユニセフ物資調達局のスイ・ラウティオです。私が働く物資調達局では、世界各地のユニセフの支援計画を実現できるように、必要な物資を必要とする場所へ調達し届ける仕事をしています。

本日に様々な支援物資がありますが、なかでも最も大きな割合を占めているのは、ワクチンをはじめとする保健に関わる物資です。昨年、ユニセフは世界中で暮らすすべての5歳未満児の45%に予防接種を提供しました。この事実から、ユニセフが扱っている物資の量や規模の大きさが想像できると思います。

私たちは、ゲイツ財団やGavi アライアンスなどのパートナー団体とともに市場に働きかけて、これまでに

ワクチンの大幅な価格の削減と持続的な供給を実現してきました。

物資調達局では、今後さらに力を注いでいきたい取り組みがいくつかあります。そのひとつが、現地の経済市場の発展を支えていくこと。現在、ユニセフは支援物資の3分の1を支援対象国のなかで調達していますが、今後はさらに連携を深め、より多くの物資を現地で調達していきたいと思っています。また並行して、支援対象国政府が行う物資供給の流れを改善、強化する手助けをしていきます。

そして最終的には、ユニセフの支援を必要としなくなり、その国の子どものために政府自身が必要な物資を調達できるようになることを理想としています。

これは、「目標達成によってビジネスが廃業になるほど嬉しいことはない」と言ったメリンダの言葉と通ずるものがあるかもしれませんね。





タンザニアの9歳の少年少女。発育阻害に陥っており、健康に発育した場合の平均身長を下回っています。©Gara Nene

世界で5歳をむかえる前に亡くなる子どもの数は590万人。その約半数に、栄養不良が関わっています

アフリカを訪れた際、7〜8歳だろうと思った少年少女が「12歳だ」「13歳だ」と答えることに、私は驚いたと言います。発育阻害に陥り、健康的に発育した場合の平均身長を大きく下回っていたのです。その原因は、母親が栄養失調で胎内栄養素を取れなかったり、乳幼児期に重要な栄養素を摂取できなかったりしたこと。「発育阻害は人間的な可能性を破壊する」とビルが断言する訳は、身長だけでなく認知力の発達面をも遅らせ、子どもたちが本来の能力を発揮できなくなり、その一生を制限してしまうからです。

## 人口問題と女子教育

ここで「しかしそもそも……」と考える方がいらつしやるかも知れません。「しかしそもそも、途上国の多すぎる子どもの数が問題なのでは？」と。ある面ではその通りです。親が自分の養えるだけの数の子どもを産み、健康に育て上げ、教育を受けさせてあげられれば、子どもたちは成人して国を豊かにする力になるでしょう。これが「避妊手段は歴史上最大の貧困絶滅イノベーション」とメリンダが言う意味です。そこでユニセフが特に力を入れているのが「女子教育」。例えば、中等教育を受ける女子が増えるほど、出生率は下がります。教育を通じて妊娠や避妊についての知識向上や意図しない妊娠



第二次世界大戦後の1946年、ユニセフの前身UNRRA（国際連合救済復興機関）が配給したミルクを飲むフィリピン・マニラの子どもたち。©UNICEF/UN4318/Unknown



ユニセフ職員からビタミンAの投与を受ける南スーダンの少年。ビタミンAが欠乏すると、免疫力が低下し病気に罹りやすくなります。©UNICEF/UN55542/Modula

## 発育阻害

ここに、乳幼児死亡に関する厳しい数字があります。「乳幼児死亡の45%は、栄養不良を一因とする」。ここでいう栄養不良とは、飢餓ばかりではありません。じつはユニセフが発育阻害と呼ぶ、カロリーは十分取れているのに適切な栄養素が摂取できていない状態が深刻なものです。肺炎や下痢といった疾患にかかりやすくなり、死亡する確率も高まります。

ユニセフは第二次大戦後の粉ミルク支援の時代以来、70年間、子どもたちの栄養を世界中で支えてきました。2015年も320万人の重度の急性栄養不良の子どもの治療を支援、約3

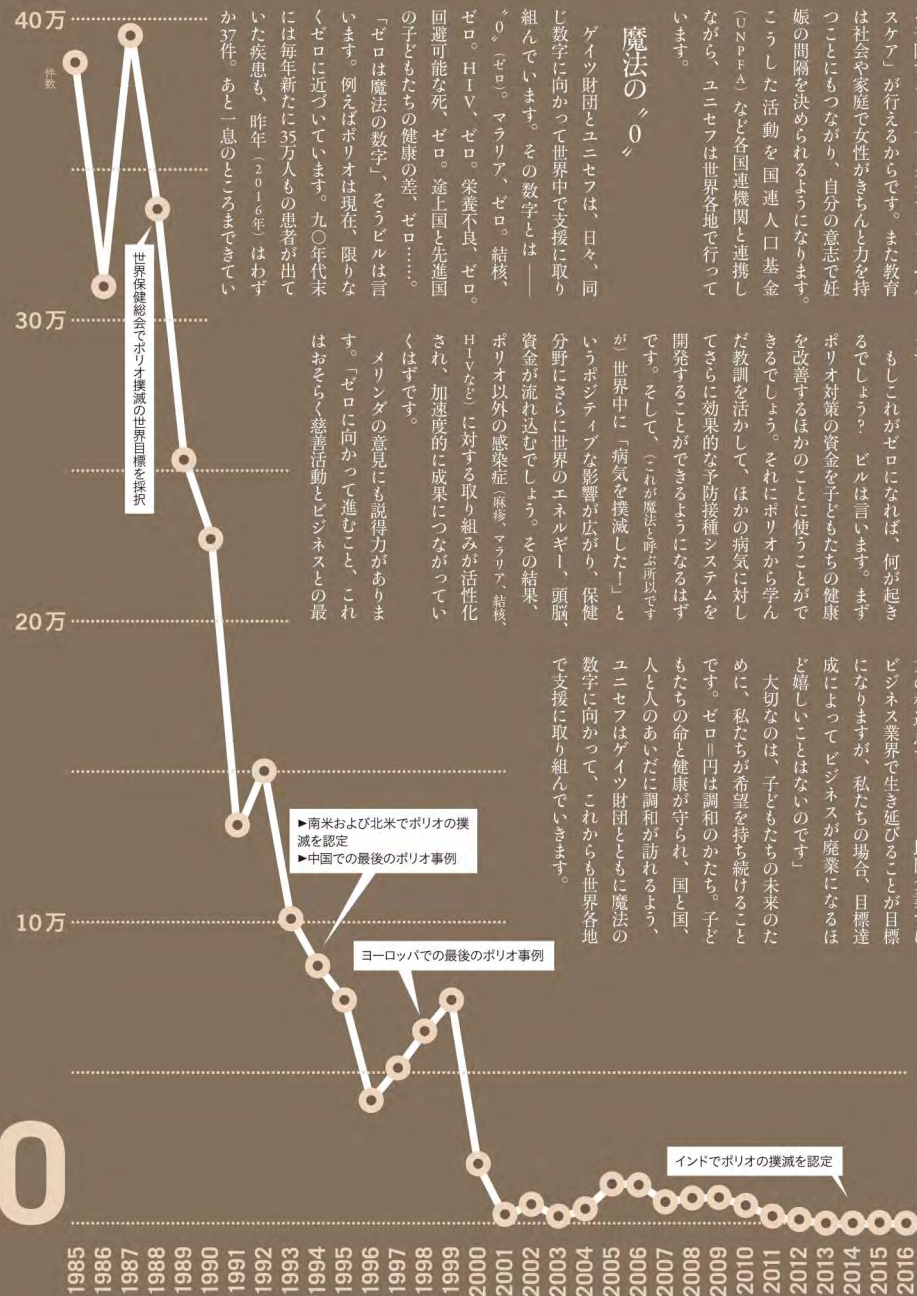
を予防する「リプロダクティブ・ヘルスケア」が行えるからです。また教育は社会や家庭で女性がきちんと力を持つことにもつながり、自分の意志で妊娠の間隔を決められるようになります。こうした活動を国連人口基金（UNFPA）など各国連機関と連携しながら、ユニセフは世界各地で行っています。

## 魔法の「0」

ゲイツ財団とユニセフは、日々、同じ数字に向かって世界中で支援に取り組んでいます。その数字とは——「0」。ゼロ。マラリア、ゼロ。結核、ゼロ。HIV、ゼロ。栄養不良、ゼロ。回避可能な死、ゼロ。途上国と先進国の子どもたちの健康の差、ゼロ……。「ゼロは魔法の数字」、そうビルは言います。例えばポリオは現在、限りなくゼロに近づいています。九〇年代末には毎年新たに35万人もの患者が出ていた疾患も、昨年（2016年）はわずか37件。あと一息のところまできてい

ます。もしこれがゼロになれば、何が起きるでしょうか？ ビルは言います。まずポリオ対策の資金を子どもたちの健康を改善するほかのことに使うことができるでしょう。それにポリオから学んだ教訓を活かして、ほかの病気に對してさらに効果的な予防接種システムを開発することができるようになるはず。そして、これが魔法と呼ぶ所以です。世界中に「病気を撲滅した」というポジティブな影響が広がり、保健分野にさらに世界のエネルギー、頭脳、資金が流れ込むでしょう。その結果、ポリオ以外の感染症（麻疹、マラリア、結核、HIVなど）に対する取り組みが活性化され、加速度的に成果につながっていくはず。メリンダの意見にも説得力があります。「ゼロに向かって進むこと、これはおそらく慈善活動とビジネスとの最

大の相違点でしょう。民間企業ではビジネス業界で生き延びることが目標になりますが、私たちの場合、目標達成によってビジネスが廃業になるほど嬉しいことではないのです。大切なのは、子どもたちの未来のために、私たちが希望を持ち続けることです。ゼロ100円は調和のかたち。子どもたちの命と健康が守られ、国と人、人と人のあいだに調和が訪れるよう、ユニセフはゲイツ財団とともに魔法の数字に向かって、これからも世界各地で支援に取り組んでいきます。



WHO加盟国で報告されたポリオの発生件数

出典：WHO（世界保健機関）/GPE（世界ポリオ撲滅基金計画）